THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA HISTORY RESEARCH GROUP

西宮歴史調査団ニュース　第３号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944　電話　0798-33-1298

太多田川の橋と伝承（上）

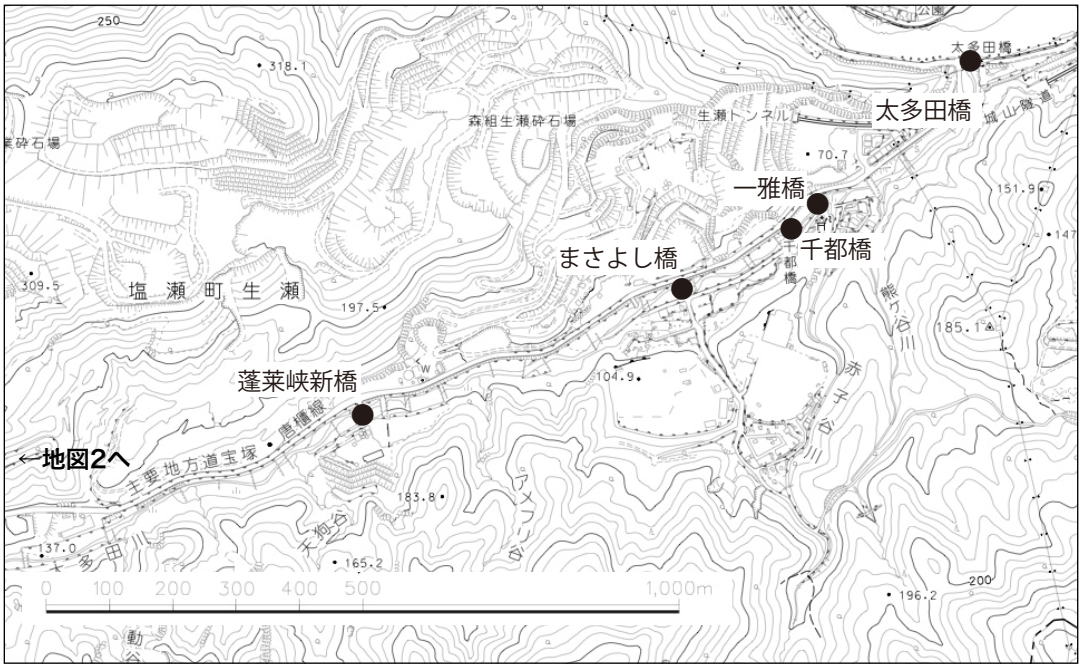
倉田克彦（橋梁班）

はじめに

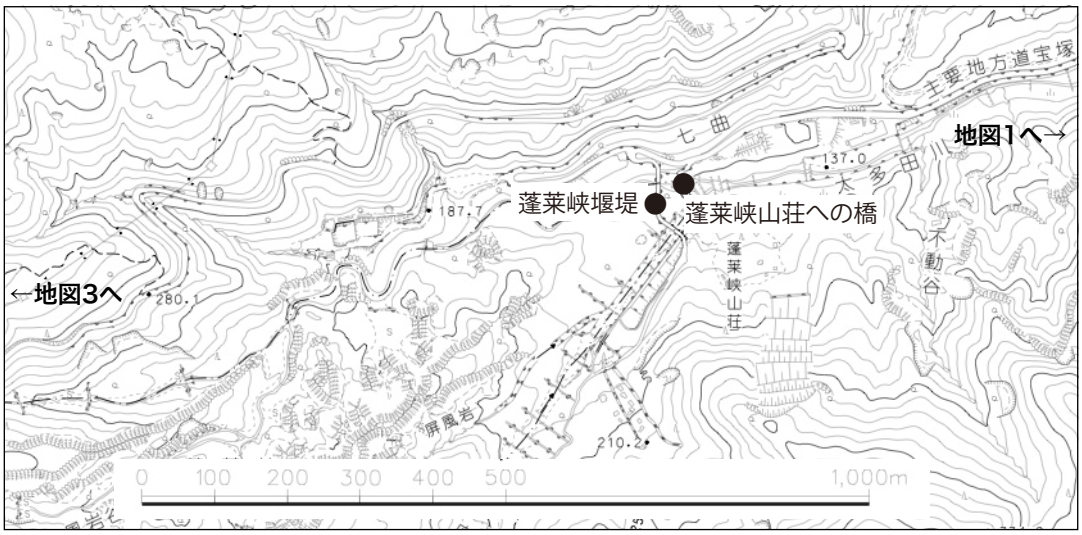
西宮市内に架かる橋の悉皆調査の一環として、山口町船坂の山あいから流れ下り、生瀬で武庫川に合流する太多田川に架かる橋を調査した。また、「船坂村地誌」に記載はあるが、現在の地図では見当たらない３つの橋、ならびにその地域の伝承について、船坂の坂田芳郎さんと生瀬の樽井正雄さんから聞き取りを行った。本稿はそれらの結果を纏めたものである。

１．太多田川下流部・中流部に架かる橋

太多田川に架かる橋は、流れ込む支流や渓流も含めると30近くある。まず下流部・中流部の橋から幾つか紹介する（地図1、2）。



地図1　太多田川に架かる橋（下流部）



地図2　太多田川に架かる橋（中流部）

（1）国道が通る橋

太多田川の最下流（武庫川との合流点）に架かる太多田橋は、武庫川に沿って走る国道176号が通っており、「生瀬村地誌」には次のように記されている。

字太多田橋　（前略）太多田川ニ架ス　本村ヨリ大阪へ通ス、土木造リ、長サ十間、幅壱間半

太多田橋のたもと（三田市寄り）から船坂への県道51号（主要地方道宝塚唐櫃線）が分かれている（写真1）。この交差点の表示板には「大多田橋」と書かれており、川は「太」、道は「大」と違う表記となっている（写真2）。この交差点の傍らに道標（写真3）と馬頭観音がある。

写真1　太多田橋（左が国道176号、手前右が船坂への県道51号）

写真2　交差点の表示

写真3　分岐点の道標

（2）個人・会社が架けた橋

（ｉ）一雅橋（赤子谷川に架かる橋、いちがばし）

太多田川支流の赤子谷川に架かる一雅橋は、個人が架けたもので、橋名板に架橋年月と氏名（「昭和参拾九年十二月／大西定吉架之」）が記載されている（写真4～6）。

写真4　一雅橋の全景

写真5　橋名板（1）

写真6　橋名板（2）

（ii）赤子谷についての伝承

赤子谷という地名は、今に伝わる悲しい物語に由来しているが、その伝承の内容は、生瀬と船坂では違っている。

生瀬では「死産や病気で死亡した赤子をこの辺りに埋めたので」といい、一方、船坂では「亡くなった赤子の泣き声が聞こえるので赤子谷と言った」というそうである。「その供養のための祠が一雅橋の近くにあって、街道を通る船坂の人は、遠くから拝んだ」ということである。

この伝承は「琴鳴山・赤子谷エレジー」と題されて、『歩こう知ろう西宮–レクリエーションガイド』や『生瀬の現代史（一）』に掲載されている。その最後の部分を示す。

> ・・・それからは、このあたりを通る旅人の耳に、この山から悲しげな琴の音と、母を慕って泣く赤児の声が聞こえるようになった。そこで村人たちは、有馬の温泉寺の偉いお坊さんを招いて、厚く回向するとともに、この山を琴鳴山、前の谷を赤子谷と呼ぶようになったということである。

一雅橋の近くに祠がある（写真7）。この祠が先の伝承に関係しているのか、していないのか。伝承とは全く関係ないとも言われている。それなら何故そこにあるのか。疑問は残ったままである。

写真7　一雅橋近くにある祠

（iii）千都橋（せんとはし）

太多田川の左岸側は県道51号が走り、それに面して採石場がある。右岸側にはコンクリート・砕石関係の工場、野球場・貸農園などがあって、事業主である会社の架けた橋が、それらと県道の間を結んでいる。

下流側から辿って行くと、まず「千都橋」があ

写真8　千都橋の全景（橋の向こうは県道51号）

る（写真8、9）。橋名板に架橋年月と架けた人の氏名（「昭和参拾九年十二月／大西定吉架之」）が記されている。

左岸（県道51号）側から右岸側へこの橋を渡った辺りの、河原あるいは川の中であった所から温泉が湧き出していたが、そこを埋め立てて現在のような道路にしたそうである。この温泉郷については、後に触れる蓬莱温泉郷と合わせて、『生瀬の現代史（一）』に記されている。

写真9　橋名板（1）

（iv）まさよし橋

少し上流側へ行けば「まさよし橋」がある（写真10、11）。

写真10　まさよし橋の全景

写真11　橋名板（1）

（v）蓬莱峡新橋

もう一つ上流側に「蓬莱峡新橋」が架かっているが、渡った先の会社への立ち入りが禁止されており、会社専用の橋のようである（写真12、13）。

写真12　蓬莱峡新橋の全景（県道51号から渡ると会社入口）

写真13　橋名板

（vi）保養所への橋

さらに上流側へ進み不動谷を過ぎて七曲にかかる辺りで、右岸側（県道51号の対岸）に保養所「蓬莱峡山荘」がある。そこへ渡るための橋が架かっているが、「私有地につき立入禁止」と表示されている（写真14）。この辺りは嘗て「蓬莱峡温泉郷」の開発が計画されたが、成功しなかったそうである。この蓬莱温泉郷につい

ては『生瀬の現代史（一）』にも記されている。

写真14　蓬莱峡山荘への橋

（3）蓬莱峡堰堤

この保養所のすぐ上流側で、船坂からの太多田川と蓬莱峡・座頭谷からの流れが合わさり、そこに曲線状の砂防堰堤（蓬莱峡堰堤）が築かれている（写真15、16）。堰堤天端上は通行禁止であった。

この辺りで県道51号は川から離れ、「七曲」と称される、急な坂道となり、遠くに岩肌を剥き出しにした蓬莱峡を望んで船坂へと向かう。

写真15　蓬莱峡堰堤

写真16　蓬莱峡堰堤にあるプレート

2．船坂の橋

「七曲」から暫くは人家が無く、次に人家を目にするのが阪急バス「舟坂東口」停留所付近である。船坂においては、「舟坂東口」停留所前の橋番号24から28の橋について述べる（地図3）。

地図3　船坂の橋（太多田川の上流部）

（1）かつてあった橋

「船坂村地誌」によれば太多田川でなく、橋ヶ谷川に３つの橋が架かっていた。

縱木橋　村ノ東方橋ヶ谷川ニ架ス、本村ヨリ大阪へ通県道三等ニ属ス（中略）

清水橋　村ノ東方橋ヶ谷川ニ架ス、本村ヨリ大阪へ通県道三等ニ属ス（中略）

戎　橋　村ノ東南橋ヶ谷川ニ架ス、本村ヨリ西宮へ通里道壱等ニ属ス（中略）

とあり、同書には「大阪街道　県道三等ニ属ス」「西宮往還　里道壱等ニ属ス」とも記されている。すなわち、縱木橋、清水橋は大阪街道が、戎橋は西宮往還が、それぞれ橋ヶ谷川を越えるところに架かっていた。しかし、現在の地図にはこれらの橋はもちろん、橋ヶ谷川も見当たらない。

（2）有馬街道（湯山古道）

調査のため、宝塚から生瀬、太多田橋を通って阪急バスの「舟坂東口」停留所まで、国道176号と県道51号を走るバスで来た。昔はこのような道やバスはなく、太多田川の石や岩がごろごろしている道とは言えない河原・瀬を、道代わりにして難儀して上がってきた。これが有馬街道と言われるもので、「四十八ヶ瀬」あるいは「四十八飛び」とも称されていた(写真16、17)。

『山口町史』によると、

慶長十年につくられた摂津国絵図（西宮市郷土資料館蔵）によれば、生瀬−船坂−金仙寺−上山口−下山口−八多−淡河−三木を結ぶ道路は太い線で表されており、明らかに幕府が決めた脇往還と呼ぶ重要な道路で、俗に生瀬街道とか湯山街道と呼ばれていた。ところがこの街道は、有馬温泉への湯治客が頻繁に往来する道路でありながら、生瀬から船坂までの一里（約四キロメートル）の間には道路らしきものはなく、太多田川の川瀬を右に左に飛び越えながら有馬温泉へ向かうものであった。この難所を「四十八飛び」あるいは「四十八ヶ瀬」などとも呼ばれていた。

写真16　太多田川の流れ（1）

写真17　太多田川の流れ（2）

と記されている。

また、「生瀬村地誌」には次のように記されている。

太多田川　生瀬村ノ西南ニアリ船坂村ヨリ来リ武庫川に会ス

（中略）川ノ中央ニ船坂村ニ至ル里道一等ノ通線アリ

この生瀬から船坂までの里道一等が、太多田川の中にあることから、上記の太多田川河原を辿る有馬街道（生瀬街道、湯山街道）であろう。有馬街道を四苦八苦して上ってきた旅人は、「舟坂東口」停留所付近で一旦岸（右岸側）に上がり、少し上流側へ行ってから再び河原に下りて川を横切り左岸側へ行き、そこに湧き出している「清水」で一服して、「清水」の前に架かる橋（24の橋）を渡って、有馬街道（湯山街道、湯山古道とも称される）の旅を続けたそうである。

写真18　四十八ヶ瀬の終点付近（ガードレールの下に川あり）

（3）清水

この「清水」は三つに仕切られて、上流側から「飲み水用」、「食器洗い用」、「野菜洗い・洗濯用」としていた。県道の建設のため、昔に比べて少し川寄りに位置が変わったということである。近年、湧水量は激減したが、今でも僅かに湧き出している。

写真19　清水（奥が上流側）

（4）字樅木へ渡る橋

有馬街道（湯山街道、湯山古道）は「清水」の前に架かる橋（昔は土橋、25の橋）を通って右岸側の「字樅ノ木」へ行く。橋の傍の家は昔は旅籠や茶店で、その辺りは現在も「椴木（もみのき）」姓の家が多い。

なお、『山口村誌』では「椴ノ木」、「船坂村地誌」では「樅ノ木」と表記されているが、読みは同じ「もみのき」である。

写真20　字樅木へ渡る橋（旅人は25の橋を渡り、字樅ノ木へ）

写真21　湯山古道（対岸には旅籠や茶店があったが、今は普通の住宅になっている）

（5）地誌にある県道と川

（ｉ）県道三等

明治時代になって、生瀬から太多田川に沿って造られたた道路は、今の「舟坂東口」停留所辺りで川を渡り、湯山古道、それに続く道に繋がって、船坂村の中心地区へと伸びて行ったと推定される。生瀬において大阪へ通じる道と繋がっているこの道が、「生瀬村地誌」にある県道三等・大阪街道であろう。

（ii）橋ヶ谷川

坂田さんより「太多田川の上流部（船坂地区）のことを『ハシガタ』と昔は称していた。橋の傍らということらしいが、よくわからない。ハシガタへゴミを捨てに行ったものでした」とお話を伺った。あるいは「橋ヶ谷川（はしがたにがわ）」を「ハシガタ」と縮めて呼んでいたのかもしれない。何故かはわからないが、太多田川の上流部を橋ヶ谷川と、「舟坂東口」停留所付近から下流側を太多田川と呼んでいたそうである。

（6）樅木橋

「舟坂東口」バス停留所の前に架かる橋（24の橋）は、その所在地が字樅ノ木、渡る川が橋ヶ谷川、属する道が大阪街道（県道三等）であるので、「船坂村地誌」にある「樅木橋」であろうと推定できる。

写真22　樅木橋と推定した橋（右手･上流は橋ヶ谷川、左手･下流は太多田川）

写真23　調査風景（右･坂田さん）

［追記］

橋の調査ならびに聞き取り調査は、同じ橋梁班の衣笠周司さんと一緒に行った。本稿の写真は、主に衣笠さんが撮影したものである。

（以下、次号へ）

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し記録を作成していく文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。

西宮歴史調査団第3号　平成27年（2015）5月　日